

(第十二章)

『根本中論』の解説、ブッダパーリタ。第五卷。

論証する理由を否定する>依るものである苦しみが有る理由を否定する> [章の著述を説く]

言う。「我は有るのみである。何故かといえば、苦しみが有る故である。ここで『身体と根（感覚器官）が起こることは苦しみである。』と、一切の者が知っているが、世尊も『要約すれば、近く取る五蘊は苦しみである。』と説かれたので、それ故に苦しみは有る。拠所無く苦しみが有るとは正しくないので、それらの苦しみの所有者である何かも有り、それらの苦しみを所有するそれは、我であるので、それ故に、我は有るのみである。」

章の著述を説く>苦しみが自性として有ることを否定する> [主張命題を挙げる]

説く。もし、苦しみそのものが合理であるならば、我も有るものであろうが、苦しみそのものが不合理であるので、我が有ると何処でなろうか。

如何様にとといえば、

或る者は、「苦しみは、自らが為した」
 「他者が為した」「双方が為した」
 「無因より起こる」と主張する。
 それは、為されるに適さない。 1

ここで、苦しみを言及する者達において、或る者は、苦しみは我が為したと主張する。或る者は、苦しみは他が為したと主張する。或る者は、苦しみは我と他が為したと主張する。或る者は、苦しみは無因よりただ忽然と起こったと主張する。そのように、苦しみは我と、他と、双方が為したと言う者達のその苦しみは、我と、他と、双方が為した故に、我と他と双方の行為（されるもの）となる背理となり、「それは、為されるに適さない。」

その苦しみは、それらの行為（されるもの）であることは正しくない。何故かといえば、もし、苦しみは（苦しみ）自体が為すとなれば、有るものか、無いものが為すのか？と問えば。

そこで先ず、もし『有る苦しみそれ自体（我性）が為す。』と考えれば、それは正理ではない。このように、有る苦しみも何をする必要があるか。もしするならば、有るのではない。それ自体（我性）が為す、存在する苦しみであるものは、無因より起こったとなるか、それも我そのものが為したならば、そう

見れば無限となる背理となるので、それは主張しない。

もし『存在しない苦しみを、我（苦しみ）自体が為す。』と考えれば、如何様に無いもの自体がそれ自体を為すとなろうか。もし為すならば、兎の角も我自体を為すとなるだろう。

そのように先ず、苦しみは我（自ら）によって為されたとは正しくない。

為されておらず存在しないものに、他があると何処でなろうか？他は無いのみである故に、苦しみは他によって為されたとは正しくない。

まさしくこれによって、我と他によって為されたことは正理ではないのみであるとも解説したのである。

苦しみが自性として有ることを否定する>理由を示す>苦しみは自他各々が為したことを否定する>苦しみを基として、自他各々が為したことを否定する> [苦しみを基として、自らが為したことを否定する]

また他にも、

もし、我が為したとなれば、
それ故に、依拠して起こるとはならない。
何故ならば、これらの蘊に
依拠してこれらの蘊は起こる。 2

もし、苦しみは我によって為されたとなれば、そう見れば依拠して起こる（縁起生）とならないものであるが、依拠しても起こる。何故ならば、現在のこれらの蘊に依拠して未来のそれらの蘊が起こるとなる。世尊も

「識の縁によって名と色」

と説かれ、苦しみは我によって為されたとなれば、苦しみが因と縁の力によって起こるとならないので、それ故に、苦しみは我によって為されたとは正しくない。

苦しみを基として、自他各々が為したことを否定する> [苦しみを基として、他が為したことを否定する]

言う。「それはその如くであり、苦しみは我によって為されていない。このように、苦しみは他によって為された。如何様にといえば、何故ならば、他となつたこれらの蘊に依拠して、それらの蘊が起こる故である。」

説く。苦しみはまさしく他によって為されたのではない。何故かといえば、

もし、それよりこれは他であり、
もし、これよりそれが他であるならば、

それらの他がこれを為したので、
 苦しみは他が為したとなる。 3

もし、未来のそれらの蘊より、現在のこれらの蘊であるものが他であるとなり、現在のこの蘊よりも、未来のそれらの蘊であるものが他であるとなれば、そう見れば、それら現在の他である蘊によって、これら未来の他である蘊が為されたので、苦しみは他によって為されたともなるだろうが、それらよりもこれらは他ではなく、これらよりもそれらは他ではない。まさしく他であることが無ければ、如何様に苦しみは他が為したことが合理となろうか。

そこでこう、『如何様に、それらは他そのものでないのか。』と思えば。

それは以降で

「何かに依拠して、何かである。それは、それより他であるとは不合理である。」¹

と現れるので、それ故に苦しみは他によって為されたとも、不合理である。

苦しみは自他各々が為したことを否定する>プトガラを基として、各々が為したことを否定する>

[プトガラ自らが為したことを否定する]

言う。「苦しみそのものが苦しみを為したので、それ故に『苦しみは我が為した。』とも言わぬが、苦しみは因と縁より起こったので、それ故に『苦しみは他が為した。』とも言わぬ。苦しみはプトガラ自らが為したので、それ故に、先ず『苦しみは我が為した。』とも言うが、苦しみは他のプトガラが為したので、それ故に『苦しみは他が為した。』とも言う。」

説く。

もし、プトガラ自らが、
 苦しみを為したならば、我であるものが
 苦しみを為したプトガラは、
 それら苦しみの無いものである。 4

もし、「プトガラ自らが苦しみの蘊を為した。」といえ、君の（主張する）苦しみである蘊が無いものは、（プトガラを）明らかにするものが無いので、我がその苦しみの蘊を為したという、苦しみの無いそのプトガラは何であるかを

¹ 「何か…である。」：『根本中論』第 14 章 5 偈。

言いたまえ。このように、苦しみの蘊が無い、明らかにするものが無い、単なるプトガラのみであるものに、名付けられることも無ければ、それが如何様に苦しみを為すとなろうか。それ故に、「プトガラ自らが苦しみを為した」ということも正しくない。

プトガラを基として、各々が為したことを否定する＞ [他のプトガラが為したことを否定する]

「他のプトガラが苦しみを為した。」と言ったことに対しても説こう。

もし、他のプトガラより
苦しみが起こるならば、
その苦しみを為して与える他者は、
苦しみが無いと、如何様に適おうか。 5

もし、他のプトガラが苦しみであるこの蘊を為し、それがそれを為して、他に与えることをすれば、他がそれを為して与えられる対象であるそれは、苦しみが無く、苦しみと離れ、明らかにするものが無い、ただそれだけのものであると如何様に適うとなろうか。それを更に言及したまえ。このように、近取が無い、ただそれだけの、何かに名付けられるものも無ければ、明らかにするものの無いそれは他であったとしても、如何様に苦しみを為すとなろうか。近取が無いただそれだけのものは、一切の様相において有り得ないならば、その苦しみを為す他が何処に有れば「苦しみは他が為した。」と恥ずかしげも無く言えるのか。

また他にも、

我が為したと成立していないので、
苦しみを、他者が何処で為したのか。

ここでもし、「苦しみは我が為した。」というそれが良く成立したとなれば、然れば「苦しみは他が為した。」というそれも合理となろうが、「苦しみは我が為した。」というそれが良く成立していない—それは苦しみに我が為したと良く成立していないので、苦しみに他が為したと何処でなろうか。

何故かといえば、

他者が何か苦しみを為すことは、
それは、その我が為したとなる。 6

もし、他者が何か苦しみを為すことは、その他の我がまさしく為したとなるが、(それは) 他が為したのではない。仮にそれは、それが我によって為したのでなければ、如何様に、一方のそれは他が為したとなろうか。それ故に、我が為したことは、他によって背理となり、苦しみは他が為したとは不合理であるとは、既に示した。

それ故に、苦しみは我が為したと良く成立していないので、苦しみは我が為したことが無ければ、苦しみは他が為したと何処でなろうか。従って「他が為したとなる苦しみ」とは何であるか。それ故に、「他のプトガラが苦しみを為した。」ということも正しくない。

苦しみは自他各々が為したことを否定する > [自他各々が為していない他の理由を示す]

言う。「何？君は説者の思索を了解しておらず、自らの知恵の分別が当てはめた意味に、言葉で過失を結び付けるのか？このように、吾輩は『苦しみは我が為した。』や、『他が為した。』とは言わぬが、このように、何故ならば先ず、プトガラ自らがそれを為したので、それ故に『プトガラ自らが為した。』と言うーその苦しみよりそのプトガラは他ではないので、苦しみによってその苦しみが為された故に、異音同義より『苦しみは我が為した。』とも言うし、苦しみであるそのものはプトガラではないので、異音同義より『苦しみは他が為した。』とも言う。」

説く。何？君は根の腐った樹木に水をやるのか？君は、近取の無いただそれだけの、一切の様相において不合理であるプトガラについて、「苦しみはプトガラ自らが為した。」と言うのか？このようにもし、近取の無いただそれだけのプトガラが、何かしら良く成立したとなれば、然れば「苦しみはプトガラ自らが為した。」ということも正しくなるものであるが、近取の無いただそれだけのプトガラは、如何様にも正しくない。それが無ければ、

先ず、苦しみは我が為したのではない。

近取の無いただそれだけの、そのプトガラが無ければ、苦しみは我が為したのではないので、先ず、苦しみはプトガラ自らが為したのではない。

「その苦しみより、そのプトガラは他ではないので、苦しみがその苦しみを為した故に、異音同義より『苦しみは我が為した。』とも言う。」と言ったそれにも説こう。

それ自体が、それを為していない。

そう見れば、苦しみそのものが、その苦しみを為していない。何故かといえ
ば、このように、経過した苦しみより、それは他ではないと述べられた故であ
り、近取より他ではないとなったこれは、何も為していない。それが近取の苦
しみそのものを為したか？と問えば、何故ならば「為したものより、それは他
ではない。」という故に、近取の無いただそれだけのプトガラが為していないの
で、それ故に「苦しみそのものが、その苦しみを為した。」と言ったことは、正
しくない。

苦しみであるそのものは、プトガラではないので、異音同義より「苦しみは
他が為した。」と言ったことにも説こう。

もし、他の我が為していなければ、
苦しみは他者が為したと、何処でなろうか。 7

もし、そのプトガラは我自身が為しておらず、我そのものが良く成立してい
ない—苦しみが無いただそれだけのものはまさしく有るのでなければ、他とな
った良く成立していない自らの我性は無いので、その苦しみは他が為したと何
処でなろうか。その近取は生じておらず、無ければ、そのプトガラが有ったと
しても、他であると何処でなろうか。

そう見るので、それら一切は前述で既に返答したことに対して、君は他の言
葉で他の意味として思惟し、まさしくそれらをも言及したとなったのだ。

理由を示す> [二つの集合が為したことと、無因であるという言説を否定する]

言う。「苦しみは我と他のそれぞれが為したことは正しくなかったとしても、
苦しみはまさしく我と他の双方が集まったものが為したことは、有る。」

説く。

もし、各々が為したとなれば、
苦しみは双方が為したとなる。

もし、各々が為したことが有るとなれば、苦しみは双方が為したこと自体も
有るとなるだろうが、苦しみは各々が為したと適さないことは既に示した。苦
しみを各々が為したことが無ければ、苦しみは双方が為したことが合理である

と、如何様になろうか。我と他の双方は、苦しみが無いただそれだけのものとしてあり得ない時、如何様に、まさしくそれが苦しみを為すとなろうか。それ故に、「我と他の双方の苦しみを為した。」ということも不合理である。

言う。「もし、苦しみは各々も為していないとしても、双方が為したことも適わぬならば、ならばそう見れば、苦しみは我と他と双方が為していないので、無因より起こったのである。」

説く。

他が為さず、我が為さなければ、
苦しみが無因であると、何処でなろうか。 8

「他が為した」とは、「他がそれを為した」であり、「他がそれを為す」という主旨である。「他が為していない」とは、他が為さないことである。

「我が為した」とは、「我がそれを為した」であり、「我がそれを為す」という主旨である。「我が為していない」とは、我が為さないことである。

「他が為していない」と「我が為していない」とは、他が為さないことと我が為さないことである。

そのように、他も為していないければ、苦しみは突然であることが合理であると、何処でなろうか。もしなるならば、常に一切が起こるとなるだろう。そうであるならば、一切の努力はまさしく無意味であり、複合した大きな過失ともなるので、それは主張しない。然れば、「苦しみは無因より起こった」というそれは、まさしく善良ではない。

章の著述を説く > [その正理を他の現象にも適用する]

言う。「もし、そのように苦しみが無ければ、世尊が『迦葉よ。苦しみは有り、私は苦しみを知った。見た。』と説かれたことは如何なるものか。」

説く。「苦しみは無い。」と誰が言ったか。吾輩が

「それ故に、依拠して起こるとはならない。」²

と言わなかったか？それ故に吾輩は、苦しみは縁起生であると言うが、「我が為した」「他が為した」「双方が為した」「無因より起こった」とは言わぬ。

² 「それ故…ならない。」：『根本中論』第 12 章 2 偈 2 行目。

苦しみのみが、四様相として
有るのではないのではないけれど、
外界の諸事物においても、
四様相は有るのではない。 9

苦しみである蘊のみに、「我が為した」「他が為した」「双方が為した」「無因より起こった」という四様相が有るのではないと捉えられるのではない。色形等の外界の諸事物においても、四様相は有るのではない。

それも如何様にといえば、先ず、色形そのものが、色形の我性を為していない。もし色形が我性を為すならば、有無の何れを為すか？と問えば、そこで先ず、もし色形としてまさしく有るのであれば、それに再度何をする必要があるか。もし色形が無ければ、如何様に無い我性が、我性を為すとなろうか。もし為すならば、尋香の都も自らの城柵を築くことになるだろう。

色形が我（自ら）によって為されたならば、「色形は依拠して起こる（縁起する）。」とは不合理であるので、それも主張しない。

そこで、『その色形は他となった諸大（基本構成要素）が為した。』と思えば。

それも適わない。何故かといえば、色形の因である諸大（基本構成要素）より、色形は他そのものではない故であり、それは以降でも、

「何かに依拠して、何かである。それは、それより他であるとは不合理である。」³

と現れ、為していない、生じていない、無い色形より、諸大（基本構成要素）が如何様に他となろうか。

色形は、双方が為したのでもない。（何故ならば）各々が為したとは不合理である故である。

色形は無因より起こったのでもない。他が為しておらず、我が為していないことが、無因より如何様に起こるとなろうか。（何故ならば）多くの過失として背理になる故である。

その如く、音声等一切の事物についても、四様相は不合理であることが成立すると視たまえ。

依るものである苦しみが有る理由を否定する＞ [章の名を示す]

「苦しみを考察する」という第十二章である。

DECHEN 訳

³ 「何か…である。」：『根本中論』第 14 章 5 偈。